

高橋がこれほど釣る秘密はどこに

なぜ？ どうして？ どこが違うの？

例年、10月になると高橋さん、清水さんとの釣行が増える（以下、敬称略）。高橋は鈴鹿市在住の高橋伸である。つり人社 DVD [【数か尺ものか テンカラ新戦術】](#) の出演者。

清水は大垣市在住。高橋に師事し腕をあげ、めざましい釣果をあげているが、それでも高橋の7割にも及ばない。二人はほぼ一緒に釣行するので清水のブログ「[テンカラと建築](#)」から二人の釣果が比較できる。私も二人から釣りを教えてもらい、彼らに迫ろうとしているが、清水の半分にも至らない。

高橋と同じ仕掛けを使いながら、ここは出ないと判断した直後に、同じ流れからあっさり釣られたとき、え？ どうして？ なぜ？ どこが違うの？ おおげさに言っているのではなく、いつも私の後で、また清水の後でサクッと釣る。ただし、後から釣ったことを知らせないように静かにとり込み、リリースして我々に気遣いする。

また掛けた。振り向けば高橋である。何度も何回も繰り返されると、なぜこんなに釣るのか違いを知りたいし、彼のようになりたいと思う。私にはまだまだ上達の余地があるはずだ。

以下に、10月からの三重県の川で高橋を見て、教えてもらった釣り方について私見をまとめた。これが彼のすべてではなく、奥の深い多彩な釣り方をする。後述するように目印、ガン玉を使うがこれらを使わない一般的なテンカラの参考になると思う。

DVDで知ってほしい

高橋の秘密はどこにあるのだろうか。オフだけでなくシーズン中も同行するが、同行の都度なぜこんなに釣るのかと思う。その秘密の一旦に迫り、彼の凄腕を多くの人に知ってほしいと思った。

そこで 2017 年、私費を投じてカメラマンを雇い、高橋と尺ものハンター西郷を撮影した。高橋が凄いのは勝手知った場所ならばともかく、撮影がまったく初めての場所だったことである。そこであれほど釣るのには言葉が出なかった。

2泊3日を2回、計4泊6日で撮影した映像は36時間に及んだ。この場面ではこの角度から高橋の合わせを撮るなどの指示を出す撮影監督を行った。

この36時間からおおむね90分に編集する荒編の作業を行った。仕事の終わったあとの睡眠を削る作業だった。何よりカットした場面の中にいいシーンがあったのでないかと、カットシーンを見直し、カットするか逡巡し、決断に時間を要する作業であった。

編集監督も行った。プロの編集者に指示して音楽、テロップなどを入れ、90分の荒編のファイルを60分にまとめマザーDVDを完成した。つり人社はこのDVDにロゴを入れ、パッケージを作り2018年、つり人社から発売した。

つり人社からの私への資金還流は投じた資金の半分であったが、自分の創りたいものを創れたので満足である。この頃からテンカラのYouTubeが増え、DVDを買うより無料のYouTubeで視聴する傾向に代わっていったのも一因となり【数か尺ものか テンカラ新戦術】は余り知られていない。

数釣りは結果

DVD だけで彼の腕を知ることはできない。映像に映らなかったもの、撮ることのできない細かな動き、言葉にできない状況判断などを映像で表現するには限界がある。以下は、私なりに映像の不足を言葉で補ったものである。

数釣りにはガツガツ釣る、数釣るものが上手い、小さなものまで数のうちといったネガティブなイメージがある。そのため高橋はガツガツ釣る数釣りなのかと誤解する人がいるかもしれないが違う。

彼はバーブレスフックを使い、ネットを使わなくてもキャッチできると思えばリリースでリリースする。このため魚に触れることはまずない。もちろん一匹もキープしない。魚がほしいのではない。**高橋にとって数釣りは目的ではなく結果**である。彼の腕であれば数が釣れるので結果的に数釣りになる。

数釣れなくても、少し釣れれば自分は満足という人もいるだろうが、言葉を替えて釣れない言い訳をしているようにも思える。釣れるけれど釣らないと、釣りたいけれど釣れないは数の上では同じでもまったく異なる。今よりもっと釣りたいと思うなら高橋から教えられることは沢山あると思う。

高橋は**アタリフェチ**である。これは自身も認めていることで、ラインに出る微細なアタリをとることがテンカラのすべてである。アタリをとることに面白さを見だし、微細なアタリをとったことで完結しているように思える。そのため釣った魚のサイズや姿形にはさほどの興味を示さない。

アタリは魚からのコンタクト

高橋の持論は「アタリは魚（アマゴ、ヤマメ、イワナ、ニジマスなど）からのコンタクト。**毛バリ**を食って吐き出しているが、それに気づいていない」である。

アタリには4つある。

1. 水面上にバシヤと出る
2. 水面下で魚がキラッとしたり黒い影が反転する
3. ラインが止まる、ふわっと浮くなどの糸フケ
4. 手にコツッと来る

1は目視でわかる。もちろん、毛バリをくわえていないことがあるが。2は少し経験をつめばわかる。4のコツッと来たときの多くは毛バリを吐き出したとき。フッキングの確率は低い。

ドライフライテンカラ（ドラテン）でなければテンカラのアタリの多くが3である。魚は水中を流下する餌を食うことがほとんどで、それに比較してライズして餌を食うことは少ない。水面に出るのは季節や時間帯が限定される。

水中を流下する餌を食う魚には水中を流せばいい。この場合のアタリは糸フケである。つまり糸フケのアタリがとれれば確率は高くなる。毛バリをくわえて吐き出すまでの間に糸フケに出るかなアタリ（魚からの信号）がとれればもっと釣れるわけである。

アタリをとるタックル

高橋のタックルはかすかなアタリを捉えるために考えられている。たとえば10月以降の三重県某川のニジマスを釣るためのタックルである。ここは管理釣り場ではない。30cm～45cmの放流二

ジマスであるが、ヒレが揃っていて引きは強い。

竿：シマノ本流テンカラ ZE4.0m（本流テンカラ NP の旧バージョン）短くて扱い易い。取り込みは4.5mにズーム。射程が短くなるが、長くするよりアタリをとりやすい。

ライン：1.25号（与一） 細いラインは風の影響が少なく、小さな糸フケにも反応する。

ハリス：フロロカーボン 0.6～0.8号。フロロの方が直線的なので、アタリ感度がいい。

ハリ：土肥富のバーブレスフック 109。細軸は刺さりがいい。ただし45cmを越える大物ではゲーブが開く。

毛バリ：2cmほどのオレンジ、白、ピンクなどグローバグで巻いた毛バリ。この他、普通毛バリ、ビーズヘッドなど多種多様を用意して頻繁に交換する。基本的に先行者の使っていない毛バリを使う。「どんな毛バリで釣れました？」と聞くのは違う毛バリを使うため。ハッチがある、魚が上ずってきたと判断すると普通毛バリにすることも。

目印：ラインとハリスの間に鮎用のオレンジを1つか2つ。アタリをとるため。ただし目印だけでとっているわけではない。

ガン玉：毛バリから15cmくらい上に3B～B程度のガン玉をつける。目的は底をとるため。コツ、コツと底石をとっているのがわかるようにガン玉の数や重さを頻繁に調整する。ガン玉はビーズヘッドより重さの調整ができる。毛バリとの間が短い方がアタリ感度はいいが、自然に流れにくい。

餌釣り？

オンシーズンの溪流でも目印、ガン玉をつけることが多い。魚が上ずっていると思えばつけないが多く、多くの場面で使用する。「底にいる魚に毛バリを水面近く流しても釣れない。ガン玉を使えば底にいる魚に毛バリを届けることができる」がその理由である。

ある年の9月、岐阜県石徹白に高橋、清水と釣行したときのこと。いつものように高橋は私や清水に先行させ、自分が先行することはない。二人が普通毛バリで釣って、もう出ないと思った同じポイントで高橋が掛ける。なんで？ 小さなガン玉をつけていた。毛バリを沈めれば普通毛バリで釣れなかった魚が釣れるからと。

目印、ガン玉をつけ、沈める釣り方から、餌を毛バリに替えただけの餌釣りじゃないかと思う人がいるかもしれない。

しかし、高橋は餌釣りより釣るのではないかとさえ思う。さらに餌釣りは「餌で釣る」が、無味無臭の毛バリで釣るのだからこれを餌釣りという指摘はあたらない。

テンカラの定義があるわけではない。「**リールのない竿を用いて毛バリで溪流魚を釣る方法**」とすれば、そこに目印をつけ、ガン玉をかませようがそれは魚を釣る方法の一つである。目印、ガン玉をつけるかは好みの問題である。自分の好みでなければ、つけなければいいだけで、これはテンカラではないと言うのは的を得ていない。

食っているのにアタリがない

糸フケで出るアタリは様々である。わかりやすいのが

- ・ラインが止まる

- ・ラインの流れが遅くなる
- ・スッと浮き上がる
- ・わずかにたるむ である。

これらは、うん？何となく違う！と感じるラインの動きでわかるアタリである。この瞬間は魚が毛バリをくわえている。それがハリスを通してラインに出た信号である。このようなわかりやすいアタリの場合は合わせの確率が高い。

しばしばピックアップしたら掛かっていたことを経験する。アタリがないので食ってないと思ってピックアップしたら食っていた！ キャリアの長い私でも結構な頻度である。毛バリをくわえているときとピックアップのタイミングが合ったときである。偶然のタイミングである。つまり、**食ってないと思っていたが、実は食っていたのである。**

ということは食っているのに気づいていないことが沢山あるのではないか。高橋の持論である「食って吐き出しているが、それに気づいていない」のだろう。アタリはラインに出る。ラインが止まるような明確なアタリではないが、どこかでくわえているアタリ（信号）がラインに出ているはずである。

それがわからない。高橋に後についてもらい、アタリを指示してもらったことがある。ラインは何の変化もなく流れているように思ったが、「アタリ！」と言われてドキ！としたことがある。

「ええ！ 今、アタリがあったの？」

「ありました」

私にはまったくわからなかった。高橋ならその魚を釣り、私はアタリがない、いないのでは思っ

てしまう。

答え合わせは合せてみろ

ガン玉をかませて底をとるように流すのでしばしば底石に掛かることがあるが、魚が底にいるならその層に流さないと釣れないという考えから、むしろそれが正解とのこと。

底石にガン玉があたり、その都度、ラインがかすかに止まったり、わずかに浮き上がったりする。流れにもまれても同じことがおきるが、アタリかもしれないので、軽く竿先をあおり「きいてみる」

そのとき重さを感じれば合わせをする。ただし合わせは小さい。「きく」ときの竿のあおりとほとんど変わらない。小さい合わせでもフッキングするように軸が細く長いハリを使っている。ときどき合わせてもバレることがあるが、合わせが小さかったからと自認している。このように頻繁に「きいている」

わずかな、かすかなラインの動きに対してきく。それがアタリかどうかはわからないが、アタリかどうかは合わせてみなければわからない。「答え合わせは合せてみろ」が持論である。

おそらく、多くの経験を通して私が見逃しているかすかなラインの動きから食っている、とわかるようになったのだろう。高橋のレベルになるにはとてつもない経験が必要だろう。私には及ばない高みである。

漫然と流すな

高橋から教えられることは多い。どこかでアタリが出ると思わず、アタリが出るであろう場所を決めておくこと。たとえば沈み石の前、横、後でアタリがあるはずなので、そこに向けて毛バリが流れるようにし、アタリを待つ。漫然とどこかで出るだろうと思っているとアタリを見逃す。

いるだろうと予想した魚の前にできるだけ毛バリが直線的に流れるようにする。直線的に流れると魚はくわえやすい。その距離は長い方がいいが、直線的に流れるなら短くてもよい。

張らずゆるめず

しばしばラインが水中に入るように流すことがある。水深があり、毛バリが底に届かないときラインまで水の中に入れてしまう。その逆にラインを高くあげ、ハリスが水から出るように流すことがある。いずれも魚の層に毛バリを送り込むためである。そのとき張らずゆるめずと言う。ハリスがピンと張っていても、ゆるんでいてもアタリはとりにくいから。張らずゆるめずは極めて感覚的であり、そうなのかとしか言えない。

鏡のようにフラットに流れるところでは、ラインを 1m くらい水面につけてラインもフラットに流すことがある。ラインとハリスの結び目がわずかに変化したら合わせる。張らずゆるめず流れるのでアタリが出やすいのかもしれない。

毛バリについて

グローバグで巻いたオレンジ、白、ピンクの 2cm ほどの毛バリを使うことが多い。色は関係

しないと考えているようだ。ハッチがあり虫が飛び出すと普通毛バリに替えることがある。魚が上ずっているとの判断である。サイズは#16~#18 くらいと小さい。ハリスを0.6号にする。これで45cm くらいまではとれると言う。ただし、虫の羽化がなくなったと判断したときの毛バリ交換は早い。

状況判断

いろいろ私見を書いたが、私にわかるのはあくまで仕掛けとテクニックの一部である。高橋の釣りの本丸は状況判断にある。なぜその場所がいいと思うのか、なぜそこでアタルとわかるのか、なぜその毛バリを使うのか、見切る理由は何かなどは多くの経験にもとづく状況判断から導き出されたものである。

高橋自身、なぜかを言葉で説明することはできないだろう。膨大な経験を蓄積したAIが答えを出しているのだとしか言いようがない。

DVDでは表現できない部分を補足的に書いたが、参考になれば幸いである。